

〈ゲスト研究会報告〉

ラファエル・ヴェルシェール著 『トライアスロンの哲学 鉄人たちの考えごと』を翻訳して

加藤 洋介 一橋大学大学院社会学研究科助手

1. はじめに

本報告では、2022年5月に出版されました拙訳の『トライアスロンの哲学¹⁾』に関しまして、トライアスロンというスポーツの概要と、当該書籍を翻訳することになったきっかけなどを簡単にお話しさせていただいた上で、本書の内容を章ごとにご紹介させていただきます²⁾。

2. トライアスロンについて

まず、トライアスロンというスポーツについて、簡単に説明いたします。

トライアスロンとは、水泳(スイム)、自転車競技(バイク)、ランニング(ラン)を継続して行うマルチスポーツです。この競技は距離に応じたいくつかのカテゴリーがあります。以下に主なものをご紹介します。

まず、「スタンダードディスタンス(オリンピックディスタンス)」と呼ばれているものがあり、スイム1.5キロメートル、バイク40キロメートル、ラン10キロメートルで行われます。これは、現在オリンピックで採用されているもので、日本各地で行われている大会は、これが主流となっています。

次に、「ミドルディスタンス」、あるいは「ミドル」と略称されているカテゴリーがあります。このカテゴリーの各種目の距離は様々ですが、総距離が「スタンダードディスタンス」以上、後述の「ロングディスタンス」以下のものが該当します。このカテゴリーには、後述の「アイアンマンディスタンス」の半分の距離で行われる「ハーフ・アイアンマン(IRONMAN70.3™)」と呼ばれる大会も含まれます。

最後に、「ロングディスタンス」、あるいは「ロ

ング」と呼ばれるカテゴリーがあり、これは先述の「ミドルディスタンス」以上の距離で行われるものが該当します。中でも知られているのは、3.8キロメートルのスイム、180キロメートルのバイク、42.195キロメートルのランによって行われるもので、これは「アイアンマンディスタンス」とも呼ばれ、IRONMAN GROUPによって運営されているIRONMAN™ブランドを掲げる大会が最も有名です。日本で行われている「ロングディスタンス」の大会は、2019年現在、新潟県の佐渡島、長崎県の五島列島、沖縄県の宮古島、鳥取県米子市の4か所で行われています³⁾。

3. 翻訳の動機

本書の翻訳の動機を述べさせていただきます。

私は、約10年前の2013年より、日本各地で行われるトライアスロンの大会に参加するようになり、文字通りこのスポーツに「ハマる」ことになりました。この間、なぜ自分がこのスポーツに打ち込むようになったのか、また、このスポーツが近年多くの実践者を集めるようになっていのはなぜかと考えるようになりました。同時に、トライアスロンを扱った書籍やウェブサイトの記事に、「キャリア形成に有益」や「なぜトライアスロンをする人は仕事ができるのか」など、自己啓発的で自己肯定感を満足させるような文言が登場するのはなぜかと考えるようになりました。

2020年の夏ごろに、同年8月7日付の、フランスの日刊紙『リベラシオン』電子版を読んでいると、現地で出版されたばかりの本書に関するインタビュー記事が目にとまりました⁴⁾。興味を覚えて読んでみると、先述の自分の疑問に答えてくれるものであるように思われました。原著を購入し

て通読してみたところ、トライアスロンを扱った書籍として大変ユニークで、日本において同様の内容を持った類書は見当たらないことを知りました。本書の見解が日本ではどのように受け止められるかについて強く興味を持ち、本書の翻訳を決意した次第です。

なお、この記事は本書の簡潔な要約になっており、以下の報告では、当該記事も時に参照したいと思います。

4. 原著について

本書の著者、ラファエル・ヴェルシェール (Raphaël Verchère) 氏は、フランス在住で、現在リヨン近郊のリセ (高校) の哲学教師として勤務されています。哲学博士であり、教授資格の保持者であり、スポーツ哲学の研究者として、かつて「スポーツにおける脆弱性・イノベーション研究所 Laboratoire sur les Vulnérabilités et l'Innovation dans le Sport」(リヨン第1大学) などに参与にされた方で、多くの業績を上げられています。青春期に自転車競技で活躍されたそうで、地方大会での受賞経験もあり、近年になってトライアスロンに参戦するようになったとのこと。本書は、2020年に、フランスの Les Éditions du Volcan より出版されました。

5. 本書の特徴

本書の特徴としては、以下の5点が挙げられると思われます。

- ・市民スポーツとして広く浸透するようになったトライアスロンを専門的に扱った書籍であること。
- ・スポーツ関連書籍によく見られるような、著者の人生論や価値観を披歴したり、単なるノウハウを解説したりする書物ではなく、西洋哲学を中心に、心理学、社会学など多様な学問的視点から、理論的・批判的にこのスポーツにアプローチしていること。
- ・体裁や構成はアカデミズムの方法に則るもの

が、専門的な学術書というわけではなく、時折筆者の体験を冗談も交えて語るようなくつろいだ調子で書かれており、広い読者を想定していることがうかがえること。

- ・トライアスロンだけでなく、スポーツ一般における嗜癖や苦痛のとらえ方、テクノロジーと身体の関係、スポーツにおける業績主義と貴族主義、性差・ジェンダーの問題など、スポーツ界におけるアクチュアルな諸問題も議論の俎上に乗せていること。
- ・参照されている文献や事例などはフランス国内のものが確かに多いが、本書の内容はフランスにおける法や習慣、生活に詳しくなければ理解できないものではなく、日本人でも十分理解できる内容であること。

6. 本書の構成

本書は、アイアンマンディスタンスの競技に、著者が初めて参加した際の体験記と執筆の目的を表明した、序論にあたる「ヴィシー、八月二七日日曜日、午前五時」以下、アプローチする角度に応じた6つの章より成っています。それぞれ、「トライアスロンの歴史」、「トライアスロンの形而上学」、「トライアスロンの認識論」、「トライアスロンの心理学」、「トライアスロンの政治学」、「トライアスロンの社会学」というタイトルが与えられています。

7. 「トライアスロンの歴史」

最初の章となる「トライアスロンの歴史」では、古代から近代までの混成競技の歴史と、現在のトライアスロンが誕生し発展してゆく過程が叙述されます。混成競技という観点では、古代ギリシアにおける「五種競技」までさかのぼり、それが「完璧な戦士」としての素質を証しするものであったことが指摘されます。著者によれば、近代の「スポーツ」が成立してゆく中で、この混成競技＝複数の競技(動作)を行うことの目的は、ピエール・ド・クーベルタンが構想した近代五種やジュール・エベールの「自然体育法 *méthode naturelle*」

などに見られるように、「完璧なアスリート」であることを立証することとなりました。古代においても近代においても、複数の競技をマスターしていることが「完璧さ」を証するものとされていたのです。

また、これとは独立した別の文脈で、近現代のフランスにおいて、「三種のスポーツのレース *course de trois sports*」、「ダブルイヤール選手権 *championats des débrouillards*」、「トゥシュアトゥのレース *course des touche-à-tout*」などの、トライアスロンの先行競技ともいべき混成競技が様々なかたちで試行されていたことが紹介されます。しかし、現在知られている通りのトライアスロンは、この豊かな歴史を持つフランスの混成競技とは別の起源を持つものであると述べられます。

現在行われているトライアスロンの原型は、70年代前後にアメリカで登場した新たなスポーツに多少影響を受けるかたちで、その萌芽を現しましたが、決定的な出来事は1977年のハワイで起きました。アメリカの海軍士官のジョン・コリンズにより、その地域で行われているハードな持久競技の3つを組み合わせて、レースを行うことが提案され、翌1978年に、初めてのアイアンマンディスタンスでのレースが行われました。翌年の1979年にも同地域で競技が行われ、女性のマラソンへの参加が一般的ではなかった時期に、すでに女性の参加者がいたことに著者は注目しています。

その後、このレースはヨーロッパにもたらされ、フランスでは1982年、ニースで初めての大会が行われました。そして、1980年代を通じて、開催される大会数・参加者数は大幅に増加して行き、1989年には、ITU（国際トライアスロン連合）の創設と併せ、初めての世界選手権がフランスのアヴィニョンで開催されました。2000年のシドニーオリンピックからは、ついに正式なオリンピック種目になりました。

8. 「トライアスロンの形而上学」

本章では、自然に関する西洋的想像力とこの競技との結びつきが考察されます。古代ギリシアの哲学者エンペドクレスの四大元素論に依拠しつつ、フランスの哲学者ガストン・バシュラールと、現在パリ第5大学のSTAPS (*Sciences et Techniques des Activités Physiques et Sportives*) の教授であるベルナル・アンドリュウ氏の議論を参照しながら、自然を構成する各元素とトライアスロンを構成する各競技の結びつきが分析されます。四大元素論において基礎となる物質は、「水」、「空気」、「地」、「火」ですが、著者によれば、「水」は水泳、「空気」は自転車競技、「地」はランニング、「火」は選手の体温と日差しが対応することになります。この視点に基づき、著者は、トライアスロンは、実践者が自然を全体論的（ホリスティック）にとらえ、それと一体化しようとする競技であると述べますが、他方、競技に際して自然は乗り越えられるべき障壁としても現れているという点において、この競技において自然は大変両面的（アンビヴァレントな）性格を持つものであるとも指摘します。

また、著者は、「トライアスロンは、諸元素と非常に近接していることが義務であった、いにしえの人間の条件を復活させることのできる数少ないスポーツであるように思われる⁵⁾」と指摘します。しかしながら、プリミティブな人間と自然の関係を取り戻すという点において、エコロジーの言説と良く適合する一方で、トライアスロンは、技術を駆使した用具を使用して自然と対峙することから、「自然の主人かつ所有者として」勝ち誇る近代的な人間を祝すものでもあるとも述べられます⁶⁾。

このように、この競技における自然の両面的性格は、競技中の個々の実践者にとってのミクロな視点においてだけでなく、歴史・社会的人間との関係というマクロな視点においても存在すると言いうことができるでしょう。先に紹介した『リベラシオン』紙上でのインタビューで、この点に関して著者は次のように述べています。

「(インタビュアー) あなたはまさに、形而上学的視点から、トライアスロンは自然の諸元素となじみ深くあることを望む実践であると明らかにしています。その意味において、このスポーツは現在のエコロジーの目標に答えるものなのでしょうか。

(原著者) それについては、紛れもない両義性が存在し、このことは哲学者ベルナルド・アンドリュウの仕事を採用すると理解できます。彼は、広い意味において彼がエコロジーと呼ぶものへの身体的実践の関係を、すなわち自然への関係と同時に身体への関係が作られるその仕方について考察しました。この点において、トライアスロンは特殊です。それは、他のスポーツ以上に直接的なかたちで、水・空気・地・火という四つの元素に私たちを向き合わせるものだからです。ここには、自然に立ち返りそれと一体化することへの理想があるのです。

ですが一方で競争という側面があり、これは行動において、これらの様々な元素を乗り越えるようトライアスリートに促します。例えば、水泳は我々に水という元素に向い合えますが、水はまたトライアスリートにとって障壁としても現れます。なぜなら、それは彼が望むとおりに早く進むのを妨げるからであり、そこから流体力学を改善し、ある種の仕方で自然の戯れを回避する労力が生まれることとなります。一つの両価性があり、これは、このスポーツが行われる際の組織立てそのものにおいてすら見られることであって、トライアスロン連合の当局が、エコロジカルな努め(ごみをゼロにするなど)についてのリーフレットなどで、持続可能な発展のキャンペーンを推し進めています。たとえ、トライアスロンをすることが、関連品の製造や地球上あちこちをアスリートが移動したりすることによって、看過できないほどの炭素の痕跡を残すとしても、です⁷⁾。

9. 「トライアスロンの認識論」

本章では、トライアスロンをはじめとするスポーツにおいて、テクノロジーを使用した機器、

ソフトウェア、サービスが、スポーツの実践者に新たな「現実」=「ハイパー・リアリティ」を提供するものとなっており、とりわけ「数量化 quantification」することへの志向が、スポーツにおける身体感覚を変容させていることが述べられます。ここで問題にされているのは、スポーツをする者の主観的身体感覚と、例えばランニングや自転車競技の場合ではGPSウォッチやサイクルコンピュータが示す数値が該当しますが、身体の状態・活動内容を示す客観的指標とが分離し、この後者が前者を凌駕してしまうことです。

この「ハイパー・リアリティ」により、現実の身体とは別のシミュラクルー「シミュラクル」とは現実の代替物を意味しますが、必ずしも現実による裏付けを必要としないという性格を持ちます⁸⁾。一としての身体、すなわち「ハイパー・身体」に我々は向き合うようになっていると著者は指摘します⁸⁾。この「ハイパー・身体」の時代における、我々の身体への向き合い方は、「精神と身体」というモデルに基づくものではなく、身体が直接的関係から放逐された、「精神と、身体の状態を把握し操作するBMI (ボディ・マシン・インターフェース)」という新たな二元論で示されるものであると述べられます。

ここで述べられている「ハイパー・身体」のモデルにおいては、現実の身体は、少し古い言い方をを用いると「疎外された」身体とも言うべき、主体にとってよそよそしいものとなっていると言えるでしょう。先に紹介した記事において、著者は以下のようにこの傾向について述べています。

「(原著者) 私にとって本当のところ実に独特だと思われるのは、トライアスリートが自分のパフォーマンスを計るのに器具を使用し、その表示と比べながら自分のパフォーマンスを調整し、こうして、直接与えられる感覚から切り離されてしまうことです。これは、身体と自然への関係においてアスリートが本当に大きく変化したということであり、これは媒介する機器によってもたらされたものなのです。例えば、ホーム・トレーナー

や流水プールなどの自宅トレーニングの装置の成功もまた、ハイパー・リアリティのコンセプトについての哲学者ジャン・ボードリヤールの考えを踏襲するなら、現実のシミュラクルを提示することでこの自然との切り離しに参与するものです。この仮定においては、トライアスロンはハイパー・スポーツとなり、そこでは、スポーツを行う者は自分の体に対して距離をとって、自分の体をいっそう身体—機械ととらえるのです⁹⁾。

10. 「トライアスロンの心理学」

本章では、トライアスロンにおける心理面の特徴について、「体を動かすことに対する依存・嗜癖」、「この競技における苦痛の性格」、「この競技におけるマゾヒズム」、「この競技に固有の喜び」などに焦点があてられます。

一般的に「依存dependence」や「嗜癖addiction」は例えば薬物依存やアルコール依存などのように、治療が必要な精神的な病理とされることが多いように思われます。本章では、フランス語の「ビゴレクシー bigorexie」という単語が示す通り、スポーツの実践における「体を動かすことに対する依存・嗜癖」が存在することが指摘され、関連する学説が紹介されます。そして、スポーツにおいては、この依存や嗜癖は、一般的には「病理」とはされず、逆説的なことに、模範的なスポーツ選手が持つものというポジティブな仕方で評価され、選手たちの成功を条件づけるものとするらなっていると述べられます。このスポーツ選手における心理的傾向は、後述の章の「トライアスロンの政治学」での、スポーツにおける「業績主義」と「貴族主義」の分析においても取り上げられます。ここでは、この傾向はスポーツにおける成功を構成する要素の一つである選手の「性格」と結びつくものであって、スポーツにおける「貴族主義」と関連するものであることがほのめかされています¹⁰⁾。

「トライアスロンにおける苦痛の性格」については、主にウィリアム・ブライデル氏¹¹⁾の論文“Finish...Whatever it Takes” Considering Pain

and Pleasure in the Ironman Triathlon : A Socio-Cultural Analysis¹²⁾に依拠しながら、アイアンマンディスタンスのトライアスロン実践者において「ポジティブな(良い)苦痛」と「ネガティブな(悪い)苦痛」という二種の苦痛が把握されていることが注目されます。ここでの「ネガティブな苦痛」とは、怪我や病気などの観念に結びつくものであり、「ポジティブな苦痛」とは、生産的なものであってパフォーマンスの源とされます。そして、トレーニングや大会中の実践における、これら二種の苦痛を管理することと、ネオリベラリズムにおける苦痛管理のイデオロギーとの結びつきが指摘され、以下のように述べられます。

「新自由主義的な苦痛管理、それはすなわち、ネガティブな苦しさを認識してそれを回避し、ポジティブな苦しさをパフォーマンスの源として手なずけることを習得しつつ自身の健康を管理するのは各人の責任であるということである。こうしたことによって、自律的で責任を持ち、社会にとって有益で、われわれの世界の経済的利害に順応した主体を生産できるようになる。資本主義的で自由主義的なグローバリゼーションの苦痛の準備学校としてのトライアスロンというわけである¹³⁾。

ところで、持久競技の中で特にハードとされるトライアスロンにおいて、「苦痛を愛好する」ことを意味するマゾヒズムの傾向が存在することは、この競技を行わない人々から見ても特に顕著なことではないかと思われます。本章では、このトピックに関して、まずマゾヒズムについての精神分析における議論が紹介されます。著者は、精神分析、特にフロイトの学説において顕著な、様々な心的様態をエディプス・コンプレックスなどの単一の図式において把握しようとする還元主義的傾向を指摘し、マゾヒズムのありようについての、より適切な説明を、ジル・ドゥルーズの議論に求めます。ドゥルーズは、フェリックス・ガタリとの共著『千のプラトーン 資本主義と分裂症』にお

いて、マゾヒズムを次のように説明しています。

「マゾヒストは、一つの器官無き身体を作り上げ、欲望の存立平面を抽出するための手段として、苦痛を用いるのだ¹⁴⁾」。

彼らがいわゆる「68年」の思想家であり、それまで自明のものとされていた「人間」や「主体」を疑問に付し、「欲望」を原動力とする私たちのありようを「器官無き身体」など、別の仕方で表現しているため、ここだけを読むと何を言っているのか分かりづらいと思います。この同じ個所を引用しているヴェルシェール氏は、このドゥルーズ＝ガタリの議論に依拠しつつ、マゾヒズムを単一の図式に型をはめるようにとらえたり、一つの病理としてとらえたりするのではなく、ある者にとってそれは創造的なものなのだという、マゾヒズムのポジティブな理解を試みているように思われます。ヴェルシェール氏は、ドゥルーズ＝ガタリのマゾヒズム観に倣い、「…苦痛の役割は、快楽を押し戻して、もはやそれに従属するのではない創造的な欲望が自由に流れ出すようにすることである¹⁵⁾」ととらえ、先述のインタビュー記事において以下のように述べています。

「(原著者) 苦しむことを好むという考えを指すマゾヒズムという用語は、精神分析の領野においてはよく見られるものですが、私はこのテーマに関するジル・ドゥルーズの思想に興味を持ち、トライアスロンに関して、答えとなる一貫した諸要素を見つけました。この哲学者にとってマゾヒズムは、喜びの概念とは独立して作り上げられる欲望を抱こうとする意志に基づいており、おそらくこの意味においてトライアスロンは、喜びという考えを抑圧して自分の身体を作り上げ、パフォーマンスの高い身体を実現するものなのです¹⁶⁾」。

本章で最後に分析されるのは、トライアスロンに固有の「喜び」です。ここでは主に、スピノザ、ベルクソン、アランという3人の哲学者の、苦痛

との関係における「喜び」(アランの場合は「幸せ」)についての見解が取り上げられます。

スピノザの場合の喜びは、より完璧に、より力強くなったと感じることの喜びであり、苦痛は快活さを求めるプロセスで生じる(偶然的な)結果に過ぎず、スピノザにおいては、苦痛は別になくとも構わないものであると、著者は指摘します。ベルクソンにおいては、喜びとは、生が事物に対する己の支配力を拡大したことを示すしるしであり、苦痛は打ち勝たなければならない逆境のしるしであるとされます。そして、アランの「幸せ」については、幸せは受動的に被られるものではなく、主体が能動的に求めるものであるという事実起因するのであり、苦痛は、主体が自由を行使した成果としてとらえられると説明されます。

これらの喜びは、確かにトライアスロンの実践においてそれぞれ感じられるものであるように思います。しかし、ヴェルシェール氏は、これらの見解とトライアスロンの実践における喜びをとらえなおした時、これらの哲学者たちの述べる喜びや幸せは特にトライアスロンに固有のものではないかもしれないと自問します。先立つ章の「トライアスロンの形而上学」では、ヴェルシェール氏はトライアスロンの経験の特殊性を自然との全体論的關係に求めていました。そして、トライアスロンの喜びに関しても、この競技の形而上学的特性、すなわちこの自然との関係に求めるべきであって、その喜びの特殊性は以下の3つの経験に存するのではないかと主張します。まず、自分自身の持久力の限界の対決という経験から導き出される喜びがあります。これをヴェルシェール氏はスピノザの「コーナートゥス conatus¹⁷⁾」を引き合いに出して、あらゆる限界から自分を解き放つことができるように見える「コーナートゥス」の喜びであるとします。次に、全体論的な狙いをもって自然の諸元素に立ち向かうという経験から導き出される喜びがあります。ヴェルシェール氏は、これを、やはりスピノザを参照して、「産み出す自然」と「産み出される自然」とが合一する汎神論的な喜びであるとします¹⁸⁾。最後に、水泳、自

転車競技、ランニングという複数の身体的専門能力を自在に駆使することに存する柔軟性の経験から導き出される喜びがあります。これは、環境の変化に精力的に耐え抜くことの喜びであるとされます。

そして、著者は、こうしたトライアスロン固有の喜びについて以下のように結論付けます。

「トライアスリートの喜びの独自性は、このように、生きているものの本質それ自体に直観的に触れることに由来するものなのかもしれない¹⁹⁾」。

11. 「トライアスロンの政治学」

本章は、おそらく著者であるヴェルシュール氏の研究作業上の関心が特に強く表れた個所であり、ここでは、スポーツにおける、掲げる理念としての「業績主義(メリトクラシー *méritocratie*)」と、実態としての「貴族主義(アリストクラシー *aristocratie*)」に注目されます。また、フランスの哲学者ミシェル・フーコーの権力論を参照しつつ、選手によるドーピングなどの「違反行為」は、この「業績主義」と「貴族主義」という矛盾の中で、選手たちが取る「抵抗」の一つであると考えられることもできると指摘されます。

ここで言及されている「業績主義」は、選手たちが練習などに注いだ労力と実際の競技における結果が対応しているとする考え方であり、これは、スポーツにおいて一つのコンセンサスとなっているように見えます。ヴェルシュール氏は、我々の社会におけるスポーツの機能の一つとして、この業績の価値を例示して、競争と公正さが調和するのだということを示すことができると指摘した上で、このことは、19世紀終わりごろから20世紀初頭にかけて、スポーツが誕生した時には自明とは言いがたいことであったと述べます。ピエール・ド・クーベルタンがフランスにおいてスポーツを学校教育に取り入れることを奨励していた時期、注いだ労力と結果とが必ずしも一致する訳ではなく、スポーツには、適した身体能力を元来持って

いる者ものとそうでない者との間に溝を穿つ傾向があることをすでに指摘する論者もいたことが紹介されます。成立当初からこの「業績主義」と「貴族主義」の矛盾を抱えていたスポーツについて、ヴェルシュール氏は、「スポーツは、社会的不平等を天然の不平等に変質させる以上のことをする。またそれは、作業によってそれらを乗り越えることができるという希望も保持し、ある地点まではそうであることを許す。だが、それは初めから、各人が注ぐ労力によっては根本的に覆ることではない自然の秩序を保持し続けているのであ²⁰⁾」り、「結果的にスポーツは、一方で業績主義的・民主的・平等主義的でありつつ、他方で貴族主義的・封建的で不平等でもあるという力技を同時にやっつけてける²¹⁾」と指摘します。

こうした矛盾をはらんだスポーツ界における「業績」について、ヴェルシュール氏は、ピエール・ド・クーベルタンのスポーツ観までさかのぼって検討し、彼が立脚する「業績 *mérite*」の概念が実は両価的であると指摘します。この業績の概念は一方で、「応報的業績 *mérite rétributif*」の性格を持ち、ここでは、勝者がその勝利を得るために労力をほとんど費やしていないか、全く費やしていなかったとしても、「ベストな者が勝つ」ものであれば、業績があるとされます。これは、アリストテレスが区分した「配分的公正(正義) *justice distributive*」に対応します。他方で、この業績の概念は、「道徳的業績 *mérite moral*」としての性格も持ち、ここでは行われた行為について、行為者が注いだ労力に対して関心が示されるのであって、やはりアリストテレスに倣うと、「矯正的正義(正義) *justice corrective*」が対応すると述べられます。

また、ここでの「業績」は、スポーツが依拠する「完成 *perfection*」の概念と結びついていると指摘され、この概念がやはり両義的であると述べられます。ヴェルシュール氏によれば、「完成」ということを、それ以上は乗り越えられない完結したものであるという古代の考え方に従うと、行為者がすべてを与えたのであれば、それ以上を要

求することは誰もできないので、この概念は「固有の力量*compétence*」に依拠します。しかし他方で、近代的な枠組みにおいては、この「完成」という考えは「無限で無確定の改善可能性*perfectibilité infinie et indéfinie*」も指しており、ここでは限界は常に一時的なもので、いつもそれを押しのけることができるということになるため、業績は注いだ労力に報いるものとなると指摘されます。

こうして、ヴェルシェール氏は、スポーツにおける「業績主義」に関して以下のように指摘します。

「今日『業績主義』と呼ばれているものは、応報的業績を道徳的業績に、固有の力量を改善可能性に対応させようとする一そしてまた、その逆を行おうとするのである。実際、業績主義は、自分のヒエラルキーは注がれる労力に従って指標付けが行われており、最も作業した者によく報いるようにしていると主張する。競技の順位（応報的業績）によって獲得される位階は、個人によって注がれた労力の結果（道徳的業績）として存在しているということだろう。固有の力量と労苦が、一つの結び目に絡み合っている。成功した者は当然のように大変よく作業した者にとらえられ、一方で、失敗した者は十分努力しなかった者と判断されるのである²²⁾」。

このように、労力を注ぐことを重視しそれを奨励するスポーツにおける「業績主義」は、スポーツ界が民主的であると自称するための言わば隠れ蓑となるものであって、このことはスポーツ選手の主体性を形成する権力として作用していることが、フーコーの議論を参照して指摘されます。そして、ドーピングなどの違反行為は、この外装としての業績主義と実態としての貴族主義の間隙を埋めるために選手たちがとる「抵抗」の行為とみなすことができると述べられます。このことは、先述の『リベラシオン』紙の記事において、以下のように要約されています。

「(原著者) 歴史的には、60年代に大転換が起きましたが、その間チャンピオンは、最も『熱心に作業』した者として提示されるようになります。この逆転の目的は、哲学者ミシェル・フーコーが理解していた意味において、スポーツを一種の権力装置として確立することです。その権力装置は、作業に熱心に取り組むと同時に従順であるような主体性を生み出すことを役割とします。この作業することへの評価の背後には、強力な政治（ポリティック）が潜んでいます。ですが、この権力への抵抗形態としての何らかの行為、特に違反行為の事実を解釈することができるのも、この読解の枠組みにおいてなのです。スポーツ関連機関が非難するドーピングによる違反行為もまた、それ自体は公正な行為です。なぜなら、平等主義に配慮する立場からすれば、遺伝的に力量が劣っているようなアスリートの状態を改善してくれるからです。ある種の技術的な発明物を使用することについても同様です。これらの現象は、表彰台に上る名誉に浴する権利が無く、またスポーツの権力装置に従うことも望む者たちの抵抗行為に過ぎません²³⁾」。

12. 「トライアスロンの社会学」

最後に締めくくる本章では、トライアスロンの社会的な価値付けや、トライアスロンをはじめとするスポーツにおける性差・ジェンダーの問題が主に取り上げられます。

トライアスロンの社会的価値付け、もしくはそれが基づいている価値観に関しては、新自由主義との結びつきに注目しながら考察が進められます。「トライアスロンの心理学」では、トライアスロンの実践において、「良い苦痛」と「悪い苦痛」を選り分ける「苦痛の管理」の作法を会得することが新自由主義的振る舞いとされていました。本章では、1980年代のエグゼクティブたちやCSP+²⁴⁾の間でマラソンが人気であったのは、自分たちの企業で守るべき振る舞い方（常に前進する、疲労に打ち勝つ等）と完全に一致していたためであると指摘され、現在のトライアスロンにつ

いても同じことが言えると述べられます。また、こうした、トライアスロンと企業人の倫理との結びつきに関して、マラソンには無い固有の特徴として、「ある種目から別の種目へ移行する」という「トランジション」の瞬間の存在が挙げられると指摘され、次のように述べられます。

「このトライアスロンに独特の性質は、おそらく、なぜ多くのエグゼクティブたちがこのスポーツを高く評価しているのかを、よく説明するものである。それは、彼らの職業環境において日常的に求められている専門能力と呼応するものなのだ。それは、柔軟性、適合能力、可塑性、可鍛性などであり、大変独特な一つの仕事から、潜在的には非常に異なり、時には全く反対のものとなる別の仕事へと非常に速く移行できること—そして常に効果を上げられるということ—である²⁵⁾」。

このように、苦しさを選り分け管理できること、複数の技術を身に着けていること、素早く環境に適応すること、そして、何より自己責任のもとにこうした活動を行うことが重要となるという点において、確かに著者の主張する通り、トライアスロンは新自由主義的傾向を含むものであると言えるかもしれません。

本章の最後では、トライアスロンにおける性差・ジェンダーの問題について分析がなされます。この部分は、トライアスロンだけでなく近代のスポーツにおけるこの問題の歴史が大変よくまとめられているように思われます。

ヴェルシェール氏が指摘する通り、女性はスポーツを行うにあたって、男性に対して「存在論的に劣る」と長くみなされてきたのであり、クーベルタンがオリンピック競技について述べたような、ある種のスポーツは「男性のみによってなされなければならない」というような偏見が現在においても未だに存在するように見えます。しかし、女性の参加という点において、トライアスロンは、男女比において構成率はそれほど高くはないものの、他のスポーツと異なり、成立当初から女性に

開かれており、平等主義的な傾向を持っているとヴェルシェール氏は指摘します。事実、ハワイで1979年に開催された2回目のアイアンマンディスタンスでのレースには、女性がフルマラソンに参加することが一般的でなかった時期に、一人の女性の参加者がいました。また、この競技においては男女選手間の褒賞の平等性が実現されており、LGBTQ+の問題についてもオープンであると述べられます²⁶⁾。このように、トライアスロンにおいて、性差・ジェンダーの問題に関して、実践者たちが敏感かつオープンマインドであることについて、著者は実践者の多くが比較的高い文化資本を有していることを理由として挙げています。

そして、この性差・ジェンダーの問題に関して、スポーツのパフォーマンスにおける性差を基準とした「規範」の問題が取り上げられます。これは先述の、スポーツにおいて女性が「存在論的に劣る」とする偏見と時に結びつくものです。著者は、突出しているように見える記録を持つ女性が女性の「規範」から外れているとみなされる傾向があること、この性別の「規範」に収まっているかどうかという検証が女性に対してのみなされていること、ウルトラ級の持久競技では男女のパフォーマンスが逆転するケースが存在することなどを指摘し、ア priori に適用される性別の「規範」を批判します²⁷⁾。そして、近年のキャスター・セメンヤのケースを取り上げつつ、この「規範」を定義することの難しさを指摘します。

最後に、こうしたスポーツ界における性差の問題に対してトライアスロンはインクルーシブであることについて以下のように述べられて、本書は締めくくられます。

「スポーツはしばしば排除を必要とする。だが、インクルーシブなスポーツは可能かもしれない。大切なものは何よりも自分自身のためになされるパフォーマンスであって、他者を支配することを目指さないスポーツ。ジェンダー、年齢、障がい、体重、その他のあらゆる指標に分離を設けようと

するのではなく、彼が誰であろうと、また彼女が誰であろうと、他者と一体となりながら、筋肉によって労力を注ぐことの喜びを単に分ち合わせようとするスポーツ。トライアスロンはそれであろうとしている²⁸⁾」。

以上で報告を終わります。

本報告にあたり、発表の場を設けてくださったスポーツ科学研究室の先生方、また、この度の翻訳の作業にご助力を下さった中野知律先生に、心より感謝を申し上げます。

文末注

- 1) ラファエル・ヴェルシェール『トライアスロンの哲学』加藤洋介訳、ナカニシヤ出版、2022年。
- 2) 本稿は、2022年6月14日に開催された、一橋大学大学院社会学研究科の社研セミナーでの発表を書き起こしたものである。文章化に際して、当日の発言に書き加えや言い換えを施しているが、内容に大きな変更は加えていない。
- 3) 「2019年現在」と記したのは、2020年に始まった新型コロナウイルスの災禍により、本稿の発表を行った2022年6月時点まで、日本各所のロングディスタンスの大会が開催できていなかったためである。
- 4) Seghir Lazri, 《Le triathlon est un marqueur du passage d'un âge du capitalisme à un autre》, *Libération*, le 7 août 2020, [en ligne: https://www.liberation.fr/sports/2020/08/07/le-triathlon-est-un-marqueur-du-passage-d-un-age-du-capitalisme-a-un-autre_1796211].
- 5) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、77頁。
- 6) 本発表後の質疑応答において、参加者より、この競技とエコロジー面での取り組みに関する質問を受けた。

報告者が日本の大会で体験した限りでは、ロングディスタンスで開催されるレースは自転車競技のコースも長くなり、故意によるも

のではないとはいえ、広範囲に補給食の空き袋などのごみが散乱しているケースが見受けられる。また、ロングディスタンスのレースでは、自転車競技中の水分補給に使用されるプラスチック製のボトルは、大会主催者によりエイドステーションごとに提供されるケースが多いが、基本的に競技中に使い捨てされる。大会によっては、会場へのアクセスに自動車が事実上必須となる場合もあり、これらの点においても、競技の実施に際しての環境的負荷は低くはないようにも思われる。それでも、選手向けの競技説明会で、競技中にごみを指定の場所以外に捨てることは戒められており、例えば、長崎市の五島列島（福江島）で開催されるロングディスタンスのレースでは、大会の翌日のコース上のごみ拾いへの参加を選手たちに呼びかけるという取り組みも存在する。

大会存続のため、地元住民の協力も非常に重要となることから、少なくとも主催者の側では、環境への負荷を減らす努力はなされ続けていると言うことができるだろう。

- 7) Seghir Lazri, 《Le triathlon est un marqueur du passage d'un âge du capitalisme à un autre》, *op. cit.* 引用文中の「(インタビュー)」、「(原著者)」は、発言者を明確にするため、報告者が補足した個所である。以後も本記事から引用する場合は、同様に表記する。
- 8) 本発表後の質疑応答にて、Apple ウォッチなどのウェアラブル端末による日常の身体状態を記録することへの関心の高まりについて指摘があった。健康管理機能を持つスマートウォッチやライフログの取得に特化した機器が普及しつつある現在、スポーツだけでなく、日常においてすら、著者の指摘する「ハイパー・身体」は浸透しつつあるということも可能かもしれない。
- 9) Seghir Lazri, 《Le triathlon est un marqueur du passage d'un âge du capitalisme à un

- autre)), *op. cit.*
- 10) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、164頁。
 - 11) 2022年9月現在、カナダのカルガリー大学キネシオロジー学部准教授。 <https://kinesiology.ucalgary.ca/research/william-bridel>
 - 12) William Francis Bridel, “*Finish... Whatever it Takes*” *Considering Pain and Pleasure in the Ironman Triathlon : A Socio-Cultural Analysis*, Queen’s University, 2010, p. 195sq. 本論文は、カナダのクイーンズ大学における、ブライデル氏の博士学位請求論文であり、以下のURLで全文を読むことができる。
https://qspace.library.queensu.ca/bitstream/handle/1974/6250/Bridel_William_F_201012_PhD.pdf?sequence=3
 - 13) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、130頁。
 - 14) ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトール 資本主義と分裂症』宇野邦一他訳、河出書房新社、1994年、179頁。
 - 15) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、137-138頁。
 - 16) Seghir Lazri, 《*Le triathlon est un marqueur du passage d’un âge du capitalisme à un autre*》, *op. cit.*
 - 17) スピノザにおいては、人間を含む、あらゆる存在するものが持つ、自身の存在を保ちまた高めようとする固有の能力を指す。
 - 18) 神と自然が一体のものであるとする汎神論の立場に立つスピノザにとっては、ここで述べられる「産み出す自然」と「産み出される自然」も明確に区分されるものではなく、本来一つの神＝自然において把握されるものである。ここで述べられている「汎神論的喜び」というのは、便宜的に言うならば、「人間と自然」を二元的にとらえることを乗り越えて、自然を対象としても主体としても把握した時に感じられる喜びとすることができるようにも思われる。
 - 19) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、151頁。
 - 20) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、158頁。
 - 21) 同書、158頁。
 - 22) 同書、163-164頁。
 - 23) Seghir Lazri, 《*Le triathlon est un marqueur du passage d’un âge du capitalisme à un autre*》, *op. cit.*
 - 24) フランスにおいて、社会的・経済的地位が高く、購買力も高いとされる職業や社会層を指す語。
 - 25) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、200頁。
 - 26) 発表後の質疑応答にて、トライアスロンが性差・ジェンダーの問題にオープンである一方で、「アイアンマン」という、男性を想起させる語を使用し続けていることについて指摘を受けた。この点に関しては、著者のヴェルシェール氏も自覚しているようであり、「アイアンマン」という用語に関して、『リベラシオン』紙上のインタビューで以下の通り述べている。
「ジェンダーの問題や性別間の不平等の問題に関しては、トライアスロンは、他の実践と比べ溝を穿つような視線はあまり持っていません。これはおおかた、このスポーツをする人々の大多数が、十分多くの文化資本を使うことができているという事実によるものであり、彼らがこの社会的問題に関して非常に敏感であることをほのめかすものです。もっとも、『アイアンマン』レースの名を冠してはいても、トライアスロンは非常に急速に女性に対しても開かれるようになったのであり、『アイアンマン』という用語は、もはや同質的な男性性を指し示すのではなく、人間性に固有の自己の超越という考えを指し示すまでになるでしょう」。
- ただし、「統計的に見れば、この活動は広く男性によって行われ続けているということは忘れてはなりません」と、注意が添えられている。(引用部の発言はいずれも原著者による。Seghir Lazri, 《*Le triathlon est un marqueur du passage d’un âge du capitalisme à un autre*》, *op. cit.*)

27) 本発表後の質疑応答において、本書で取り上げられたダブル・デカ・トライアスロン（アイアンマンディスタンスの20倍の距離で行われるレースで、「ウルトラトライアスロン」の一つに区分される）については、やはり記録の男女差の解消や逆転が見られるのだろうかという質問を受けた。

1998年にメキシコの都市モンテレイで開催されたダブル・デカ・トライアスロンでは、女性の優勝者 Silvia Andonie 氏は、643時間1分49秒で完走しているが、男性優勝者 Vidmantas Urbonas 氏の437時間21分40秒の記録と比較すると大差がついているように見える。参加者6人のうち女性は Andonie 氏一人のみであるが、完走率という点からみると、男性参加者は2名が脱落した結果60%となるのに対して、女性の場合は100%となる。2019年にやはりメキシコの都市レオンで開催された2度目のダブル・デカ・トライアスロンでは、女性の優勝者 Laura Knoblach 氏は、633時間41分39秒で完走しており、依然、男性の優勝者の445時間45分15秒と比べると大差がついているが、1998年の Andonie 氏の記録を9時間以上縮めた。また、女性4人、男性6人の参加者のうち、女性は全員完走し、男性は2名が完走できなかったため、完走率という点では、依然女性の方が上回っている。さらに、男性4位の記録683時間22分13秒に対して、女性の上位3名の記録はこれをいずれも上回っており、所要時間という点においても、男女差は縮まっているように見える。

1998年の大会の記録については、https://www.angelfire.com/electronic/ultramentor/results/mexico_2deca.html（閲覧日2022年10月1日）を、2019年の大会については、国際ウルトラトライアスロン協会（The International Ultra Triathlon Association）のウェブサイト <https://www.iutasport.com/ultra-triathlon-results/results-2019/>

[results-double-deca-ultra-triathlon-in-leon-2019](https://www.iutasport.com/ultra-triathlon-results/results-2019/)（閲覧日2022年10月1日）を参照した。

一方で、アイアンマンディスタンス以上の距離で行われるウルトラトライアスロンのレースにおいては、短い距離でのウルトラトライアスロンのレースでは、男女差は縮まるものの、より長い距離になると男性が女性の記録を依然上回ると指摘する研究もある。ただし、水泳とランニングについては、距離が延びるにつれて男女差が大きくなるのに対して、自転車競技に関してはその限りではないとも指摘されている（Beat Knechtle, Christoph Alexander Rust [et al.], "Sex difference in top performers from ironman to double deca iron ultra-triathlon", *Open Access Journal of Sports Medicine*, 26 June 2014, [En ligne: https://www.iutasport.com/scientific_works/20140626_sex_difference_topperformers.pdf] .)。

28) ラファエル・ヴェルシェール、前掲書、220-221頁。